

「南岸低気圧による雪(3)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

東京で雪が降っても、地上物に当たると、あっという間に融けてしまう。布は空気を多く含んでいて、雪の結晶との接触面積も狭いので、地面や路面に落ちるよりも少し長く観察できる。



特にフェルト製の女兒の制帽は最適とわかった。雪が落ちても 30 秒ほどは融けずに残る。フェルトが起毛素材で、雪の結晶が素材の熱をほとんど吸収しないからだろう。



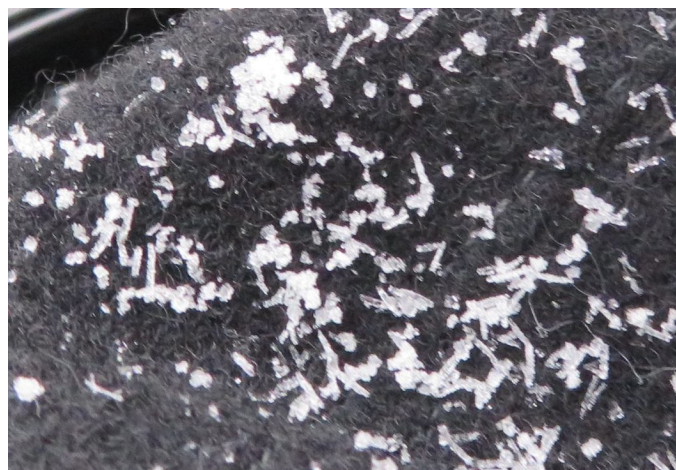
左手に帽子、右手に虫めがねを持って観察する姿が多く見られた。それでも、雪の結晶が融けるまでには 30 秒ほどしかないので、時間との勝負となる。呼気も雪を融かす原因になるので、息を殺して観察する子どももいた。時々美しい樹枝六花を発見した子がいると、歓声があがり、どれどれ? と駆け寄っていた。



クロームブック(ノートパソコン)のカメラで撮影を試みる者も多かったが、それは容易ではない。雪の結晶の観察には、やはり虫めがねが一番適している。



上はあまり良い写真ではないが、融けかけた樹枝六花が写っている。この日は気温が高かったこともあり、きれいな結晶は数百粒に一粒といったところだった。



男児の制帽も起毛素材なので、同じように観察に適していた。雪の結晶はほんの数分で種類が変わることも多い。しばらくすると、針状結晶が集まったものや、雪あられ状のものも落ちてきた。上空の大気の状態に変化があったのだろう。中谷の言葉を少し変えれば「雪は天からの教材」と言えると思った。